

Title	Allein : Mir fehlt der Glaube
Sub Title	
Author	岩崎, 英二郎(Iwasaki, Eijiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.60, (1992. 3) ,p.325(122)- 337(110)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	中田美喜教授追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0337

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Allein: Mir fehlt der Glaube

岩 崎 英二郎

最近のドイツ語には、とくに統語論的な面で、以前には見られなかったいくつかの新しい現象が目につくが、その顕著な例の一つとして、副詞や話法詞 (Modalwort)、場合によっては接続詞などを文のなかから切り離して、まずそれだけを単独で冒頭に提示し、そこで一息ついたあとと本題の文を持ち出すという、ここ十数年来新聞や雑誌の論説などで好んで用いられる独特の文体がある。この特殊な文体は、単に一部のジャーナリストたちによって愛用される段階をすでに通り越して、近頃では話し言葉にまで進出するほど一般化しつつあるように思えるので、この機会を利用してその特異な構文を検討しておきたい。新しい現象には常に関心をもち続けている中田美喜君のことだから、彼を追悼する論文集にこのようなテーマを取り上げても、きっと許してくれることだろう。

といっても具体的のどのような構文がここで問題になっているのか、上の説明だけでは分かりにくいと思うので、まずその実例をいくつかお目にかけたいと思う。なおここに掲げる例文はすべてここ数年間のドイツの新聞や雑誌からの引用なので、一々出典を挙げることは省略させていただく。

- (1) Wir werden weder Estland noch Litauen, noch Lettland, noch Georgien in die neue Union hineinzwingen, keinesfalls. Wir werden die Willensbekundungen der Völker respektieren. *Allerdings*: Die neuen Machthaber dort mißbrauchen allzuoft die Welle des nationalen Aufschwungs.

(我々はエストニアもリトアニアも、ラトヴィアもグルジアも新しい連邦にむりやり入れようとは思っていません、けっして。我々はこれらの民族によって表明される意志を尊重します。ただし、これらの民族の新しい権力者たちは国民的気分の高揚の波をあまりにもしばしば濫用しすぎます)

- (2) Historische Parallelen erscheinen mir immer ein wenig weit hergeholt. *Dennoch*: Ich fühle mich durch diese Verbrecher an die Usurpatoren erinnert, von denen es während des 16. bis zum 19. Jahrhundert Dutzende gab.

(歴史的に類似した出来事を探すという試みは、どんな場合でもいさかこじつけにならざるを得ないように私には思われます。それにもかかわらず、今回の犯罪者たちを見ていると、私には16世紀から19世紀にかけて輩出した権力篡奪者たちのことが思い出されるのです)

- (3) Gorbatschow gehört zu den Staatslenkern, die sich sehr wohl eine andere Meinung anhören können. *Mehr noch*: Er berücksichtigt auch die andere Meinung bei seiner Entscheidung.

(ゴルバチョフは自分とは違った意見を聞くことのできる国家指導者の一人です。それだけではありません、彼は決定にさいして、実際に他人の意見を顧慮するのです)

- (4) Große Schiffe haben keine Zukunft mehr. Davon bin ich persönlich überzeugt. *Nur*: Sehen Sie sich die Amerikaner an, die entmotteten zwei große Schlachtschiffe.

(大艦には未来はありません。そのことを私は個人的には確信しています。ただし、アメリカ人を見てごらん下さい。彼らは二隻の巨大な戦艦を現役に復帰させました)

以上の引用例のなかでイタリック体の部分、つまり (1) の *allerdings*, (2) の *dennoch*, (3) の *mehr noch*, (4) の *nur* の使い方に注目していただきたいのだが、とりあえず (1) の *allerdings* を例にとって考えてみよう。ふつう *allerdings* という副詞は、先行する発話を受けて、その内容のおおよそのところは認めながらも、その一部に異論を述べるさいに用いられるもので、日本語の「ただし」「もっとも」に近い意味をもっている。通常は文の内部にあって、単独で文成分として文頭もしくは定動詞の直後の位置を占めることができる。

- (1a) *Allerdings* mißbrauchen die neuen Machthaber dort allzuoft die Welle des nationalen Aufschwungs.
- (1b) Die neuen Machthaber dort mißbrauchen *allerdings* allzuoft die Welle des nationalen Aufschwungs.

それでは (1) と (1a) とではどこが違うのだろうか。かりに (1a) を日本語に訳すとすれば「ただしこれらの民族の新しい指導者たちは国民的気分の高揚の波をあまりにもしばしば濫用しすぎます」となって、(1) の訳文との違いは「ただし」のあとの読点の有無だけになってしまうが、ドイツ語の場合は、*allerdings* のあとに (1) ではコロンが置かれ、(1a) では句読点がないという正書法上の違いのほかに、*allerdings* が (1) では後続文の枠外に、そして (1a) ではその枠内にあるという大きな相違点がある。このことは後続文の語順を見ればすぐに分かることだが、(1) の *allerdings* が文の枠外にある理由は、冒頭でも述べたように、まず *allerdings* を単独で提示することによって読み手ないし聞き手の注意をそこに惹きつけ、そのあとでおもむろに自分の述べたいことを相手に聞いてもらおうという意図が働いているからである。両者の違いは耳で聞いてみればいちばんよく分かる。(1a) とは違って、(1) の場合には *allerdings* のあとに明らかにそれと分かる^(*) 間 (Sprechpause) が置かれるからである。これは (1) だけでなく (2) (3) (4) いずれにも言えることであるが、聞き手の関心を引き起こすという点でとく

に効果的なのは例えば (3) ではないだろうか．mehr noch と言って一息つけば、聞き手は「おや、まだ何かあるのか」と思って聞き耳を立てるに違いないからである．

ところで上に掲げた (1) から (4) までの引用文で示した *allerdings*, *dennoch*, *mehr noch*, *nur* の四つの副詞ないし副詞句のなかで、*allerdings* と *dennoch* は *mehr noch* や *nur* と比べるといささか異質の存在であることを知っておく必要がある．まず *allerdings* と *dennoch* の共通点について言えば、この両者は場合によっては後続文の枠内に組み込むことができるという点で一致している．*allerdings* についてはすでに述べたので、後続文に組み込まれた *dennoch* の例を見ていただきたい．

(2a) *Dennoch* fühle ich mich durch diese Verbrecher an die Usurpatoren erinnert.

(2b) Ich fühle mich *dennoch* durch diese Verbrecher an die Usurpatoren erinnert.

これに反して *mehr noch* と *nur* の場合には、後続する文のなかにこれを組み入れることができないという共通点をもっているのだが、その理由は実は簡単で、文脈からいってもともと後続文の一部とはなり得ないからにすぎない．まず *mehr noch* について言えば、これは話し手ないし聞き手が「ゴルバチョフについてはいま申し上げたこと以外にまだこんなことがあるんですよ」とコメントを加えたにすぎないのであって、これを「ゴルバチョフは物事を決定するに当たって他人の意見をも顧慮する」という文のなかに組み入れることはもともと無理なわけである．また *nur* が使われている (4) の例では、*nur* に続く文がたまたま *Sehen Sie sich die Amerikaner an!* という要求文であるために、

(4a) *Sehen Sie sich nur die Amerikaner an!*

という文を無理に作ったとすれば、この *nur* は当然心態詞の *nur* であると

解釈されてしまうという事情もある。もちろんすべての *nur* が後続文に組み込まれ得ないというわけではなく、文脈によっては組み入れることも十分に可能である。

- (5) Egon Krenz kann ein bedeutender Politiker werden, wenn er die Macht teilt. *Nur*—es kann in einer erneuerten demokratischen DDR kein Führungsmonopol mehr geben.

(エゴン・クレンツは権力を他と分かちあえばかなりの政治家になり得る。ただ、新生の民主的なドイツ民主共和国では指導権の独占はもはやあり得ない)

- (5a) *Nur* kann es in einer erneuerten demokratischen DDR kein Führungsmonopol mehr geben.

- (6) SPIEGEL: Was haben Sie zuletzt gelesen?

BECKER: „Der Garten Eden“ von Hemingway und sogar von Eckermann „Gespräche mit Goethe“. *Nur*, das glaubt mir natürlich keiner.

(シュピーゲル：いちばん最近読まれた本はなんですか。

ベッカー：ヘミングウェイの『エデンの園』とそれからエッカーマンの『ゲーテとの対話』も読みました。ただ、誰も信じてはくれませんが)

- (6a) *Nur* glaubt mir das natürlich keiner.

これはドイツのプロテニス界の若手のホープとして有名なあのボーリス・ベッカーをシュピーゲル誌がインタビューしたときの会話の一節だが、このようにごくふつうの会話にまでこの特殊な構文が入り込んできているのは興味深いことである。ただし *nur* の場合には、実際の使用例を検討してみると、後続の文に組み込むことが無理なケースもやはりけっこう多いようである。

- (7) Die Tat eines Bombenlegers, erklärt er im „Schillernden Schuft“, sei für ihn zwar „moralisch schwer zu ertragen“. *Nur*, wer hat die Piloten vor ein Gericht gestellt, die über Dresden oder Nagasaki ihre Bomben ausklinkten, fragt der Jurist.

(爆弾を仕掛ける犯人の行為は、と彼は著書『玉虫色の悪党』のなかで言う、彼にとって確かに「道義的に許しがたい」ことではある。ただ、ドレスデンや長崎の上空で爆弾を投下したパイロットたちを裁判にかけた者がいただろうか、とこの法律家は問う)

- (8) Ich bin sehr zufrieden mit dem Deutschland, wie es jetzt ist, es gefällt mir besser als das Deutschland vor 50 Jahren. *Nur*: Europa hat in Sachen Golfkrieg nicht mit einer Stimme gesprochen, und Deutschland hat gar nichts gesagt.

(私は現在のドイツにきわめて満足しています。五十年前のドイツよりもいまのほうがいいと思います。ただ、ヨーロッパは湾岸戦争のことでは意見が一つではありませんでしたし、ドイツにいたってはないにも意見がありませんでした)

これなどは (8a) のように *nur* を後続の文に組み入れることもかならずしもできないわけではない。

- (8a) *Nur* hat Europa in Sachen Golfkrieg nicht mit einer Stimme gesprochen.

しかしここで問題になっているのはドイツのことであって、ヨーロッパには直接のかかわりがいいから、*nur* は論理的にはむしろ Deutschland hat gar nichts gesagt. のほうに組み込むべきところであろう。

- (8b) *Nur* hat Deutschland gar nichts gesagt.

というわけで、nur が Europa hat... から gar nichts gesagt. までの全体にかかるようにするためには、やはり元の文のように後続文から切り離して冒頭に置くにこしたことはない、ということになる。次の例にも nur を冒頭に置く利点がよく現れている。後続する文が付結文 (Satzgefüge) で、しかも副文から始まっているからである。

- (9) Vor drei Monaten wurde ich wegen Autodiebstahls festgenommen und bin jetzt im Gefängnis. Nun bin ich also ein Krimineller. *Nur* — was wirkliche Kriminalität ist, lerne ich zur Zeit kennen. In unserer Anstalt regieren zwei Gruppen, die Drogenmafia und die Erpresser. (三ヶ月前に僕は車を盗んで警察につかまり、いま刑務所に入っている。だから犯罪者というわけだ。ただ、本当の犯罪とは何かということは、いまはじめて知りつつあるところだ。なにしろ僕らの刑務所では二つのグループ、つまり麻薬マフィアのグループと恐喝者のグループが牛耳っているんだから)

ここでちょっと書記上のことに触れておこう。ある語を後続文から切り離して、そこにいくらか間^(*)を置くということを示すためにどのような句読点を用いるべきかという問題であるが、このような言語現象自体が比較的新しいことなので、その点ではまだ共通の約束事ができていないというのが実情である。これまでに挙げた実例を見れば分かるように、句読点としてはコロン(:)を使うのが大勢であるが、(5) や (9) のようにダッシュ(—)を用いたり、(6) (7) のようにコンマ(,) を使う例も散見する。また次の例のように句読点がまったく用いられないこともまれではない。

- (10) Ich halte es für sehr wohl möglich, daß es im nächsten Jahr zu Verträgen kommt. Ich bin optimistisch, *nur* ein genaues Datum kann ich Ihnen nicht nennen.

(来年中に条約締結に漕ぎつけることは十分に可能だと思います．私は楽観しています．ただ具体的にいつごろになるかは申し上げられません)

もっともこの場合，この *nur* がはたして後続文から切り離されたものであるかどうかは，耳で聞いてみなければ分からない．この *nur* が *ein genaues Datum* だけにかかる Fokuspartikel であるという可能性 (*nur ein genaues Datum* 正確な日取りだけ) も残されているからである．いずれにしてもこの種の句読点の問題は，この用法がしだいに定着するにつれて，いずれ一般的な慣行ができあがってくることだろう．

現代ドイツ語の特徴をさまざまな角度から論じた H. Glück と W. W. Sauer の共著 „Gegenwartsdeutsch“ もこの問題に簡単に触れているが，* 同書にはこれまでに例として示した *allerdings*, *dennoch*, *mehr noch*, *nur* のほかに *echt*, *freilich*, *gewiß*, *immerhin*, *indessen*, *wirklich* などが例として挙げられている．このような語のリストは時間をかけて実例を探せばもっと増えるに違いないが，ここでとくに指摘しておきたいのは，もともと後続する文の一部ではないはずの並列接続詞の *aber*, *denn*, *und* などにさえもこの種の用法が見られるという注目すべき事実である．

(1) SPIEGEL: Im Gespräch ist eine Stiftung mit einem Gesamtvolumen von zwei Milliarden Mark.

REITER: Die Frage der Größenordnung ist eine Sache, die die Regierungschefs diskutieren müssen. *Aber*: Diese Leistung wird von Hunderttausenden erwartet, wenngleich es immer

* Helmut Glück / Wolfgang Werner Sauer : Gegenwartsdeutsch(Sammlung Metzler, Bd.252). Stuttgart 1990, S.51—53.

REITER: Die Frage der Größenordnung ist eine Sache, die die Regierungschefs diskutieren müssen. *Aber:* Diese Leistung wird von Hunderttausenden erwartet, wenngleich es immer weniger werden.

(シュピーゲル: 話題にのぼっているのは総額20億の基金ですが、

ライター: 金額の規模の問題は両政府の首脳のあいだで話し合わなければならないことです。しかし、(賠償金の) 支払いは何十万もの人々から期待されています。生存者の数は年々減る一方ですが)

- (12) 56 Prozent der Eltern in den alten Bundesländern, so zeigen neue Umfragen, wünschen sich das Abitur für ihre Kinder. Immer mehr Schüler strömen denn auch in die Gymnasien. Die Zahl der Studenten hat im Jahr 1991 erstmals die der Lehrlinge übertroffen. Dieser Herausforderung sind die Manager des Großunternehmens Schule schon lange nicht mehr gewachsen. *Denn:* Nicht erfahrene Ökonomen, sondern Parteibuch-Pädagogen werden zu Kultusministern gemacht. Nicht effiziente Stäbe, sondern starre Beamtenapparate regieren die Schulhierarchien.

(旧連邦諸州 (つまり西ドイツ筆者) の両親たちの56パーセントは、新しいアンケート調査の結果では、自分たちの子供が高校卒業資格を取得することを願っている。というわけでギムナジウムに流入する生徒の数は増加する一方である。大学生の数は1991年に初めて各種職業の見習い生の数を凌駕するにいたった。このような社会の側からの挑戦は、すでに久しい以前からもはや学校という名の大企業のマネージャーたちの手には負えなくなっている。というのも、各州の文部大臣に任命されるのは経験を積んだ経済の専門家ではなく、党員手帳をもった教育家たちだからである。効率のよいスタッフではなくて、硬直した官僚機構が学校行政の序列を支配して

いるのである)

- (13) Brecht zum Beispiel war ein absoluter Gegner dieser stalinistischen Entfaltung des Sozialismus. Es müssen in seinem Nachlaß eine Reihe sehr scharfer Gedichte zu jenen Zeiten sein. Er sagte mir damals, als ich sie veröffentlichen wollte, nein, die gehen noch nicht, die sind noch zu scharf. *Und*: Brecht hat sich nie für Leute eingesetzt, die in Schwierigkeiten waren. Er war in dem Sinne ein Autist sondergleichen.

(例えばブレヒトは社会主義のこのようなスターリン主義的な展開には絶対に反対でした。彼の遺稿のなかにはあのころのきわめて辛辣な一連の詩が残されているはずです。当時、私がこれらの詩を出版しようとしたとき、彼は私に言いました。いや、この詩はまだだめだ、まだ辛辣すぎると。それに、ブレヒトという人は苦境にある人たちのために一肌脱ぐなどということはけっしてしませんでした。その意味であの人には他に類のない自閉症患者だったのです。)

- (14) Wir haben nichts gewußt, hieß es nach '45. *Und*: Wir konnten nichts machen. Das ist jetzt im Osten Deutschlands wieder in aller Munde.

(私たちは何も知らなかった、ということが45年(1945年のドイツ敗戦一筆者)のあとでさかんに言われていた。そしてまた、私たちには何もできなかった、ということも。同じことをいま東ドイツでふたたびみな言っている)

aber, denn, undなどは上にも述べたようにいわゆる並列の接続詞であるから、後続する文を導入こそすれ、その文成分ではない。初めから文の冒頭に置かれているわけで、副詞や語法詞の場合のようにわざわざこれを文中から取り出して文頭にもってゆく必要もない。それにもかかわらずこれらの接続詞のあとにコロンのような句読点が付いているのには、むしろそ

れなりの理由がある。すなわち実際の話し言葉では、話し手がこれらの接続詞のあとにしばらく^(*)間を置いて、聞き手に後続する発話への注意を喚起しているのだということを、書き手が読み手に知らせるための手段に他ならない。それでは^(*)間の有無によって具体的にどのような意味の違い、ないしニュアンスの相違が生じるのだろうか。まず(11)の場合について考えてみよう。

(11a) Die Frage der Größenordnung ist eine Sache, die die Regierungschefs diskutieren müssen. *Aber* diese Leistung wird von Hunderttausenden erwartet, wenngleich es immer weniger werden.

(11)と(11a)を読み比べてみれば、あるいはこの二つの文をnative speakerに読んでもらって聞き比べてみれば明らかなように、両者のあいだには明白な違いがある。(11a)に用いられている *aber* は「金額の規模の問題は両政府の首脳間で協議されなければならない」ということと、「賠償金の支払いは何十万の人々から期待されている」という事実とのあいだの、論理的な矛盾とは言わないまでも、ある種の食い違いを、どちらかといえば淡々と指摘しているに過ぎないが、(11a)のように *aber* のあとに^(*)間 が置かれると、この *aber* はいわば聞き手に直接向けられていて、「しかしいいですか、よく聞いてくださいよ」という聞き手への語りかけの色彩を帯びてくるのである。このことは(12)(13)(14)のいずれについても多少なれ少なかれ言えることだが、一々注釈を加える必要もないと思うので、もう一つだけ、最後の(14)の例を検討してみよう。

(14a) Wir haben nichts gewußt, hieß es nach '45. *Und* wir konnten nichts machen. Das ist jetzt im Osten Deutschlands wieder in aller Munde.

(14a)は(14)の *Und*: Wir konnten... を単に機械的に *Und wir konnten...*

に書き直したものに過ぎないが、その結果、この(14a)は文意の不可解なものになってしまった。Wir haben nichts gewußt. という冒頭の文は、言うまでもなく Es hieß nach '45,... という主文に従属して、動詞 heißen の内容を表している。そして(14)の Und:... は実は Und es hieß:... を簡略化したもので、したがってそれに続く Wir konnten nichts machen. も、同様に動詞 heißen の内容ということになるのだが、(14a)のようにしてしまうと、そのように解釈することが困難になる。これを(14)のように解してもらうためには、どうしても und のあとにそれなりの間^(*)を置かなければならない。つまり話し手は und のあとで一息つくことによって初めて、「そしてまたこういうことも言われていたんですよ」というシグナルを聞き手に送ることができるというわけなのである。

このような話し手から聞き手への直接の語りかけの効用は、aber, denn, und などの並列接続詞だけのことではない。始めに挙げた副詞や話法詞の場合にも、多少の相違こそあれ、同じことが言えるはずである。それらすべてをここで検証する余裕はないので、興味をもたれた方は御自分で試してみていただきたい。最後に拙稿の表題とした Allein: Mir fehlt der Glaube について一言触れておきたい。言うまでもなくこれはゲーテのあまりにも有名な『ファウスト第一部』からの一句をもじったもので、もしも allein のあとに間^(*)を置いたらどうなるだろうか、というユーモアにもならないふざけた設問にすぎないのだが、事実、allein にもこの種の用法がある。ただ筆者の手元にある allein の使用例は、かなり長い前後の文脈なしには理解しにくいので、残念ながら本稿では割愛せざるを得なかった。この allein は、使用頻度はさほど高くはないが、aber や jedoch に近い意味をもつ並列接続詞である。ところで『ファウスト第一部』の「夜」の場面で天上の歌声を耳にして自殺を断念したファウストが、Die Botschaft hör' ich wohl, allein mir fehlt der Glaube. (福音は私の耳にも聞こえるが、ただ私には信仰が欠けている) と言うのはいわば独白であって、目の前に聞き手がいるわけではないのだから、allein のあとに間^(*)を置くなどと

いう設定自体が無意味だと言われればそれまでだが、かりにファウストの目の前にヴァーグナーかメフィスト・フェレスがいたと仮定して、もしもファウストが *allein* のあとで一息入れたとするならば、おそらくヴァーグナーないしメフィストは、彼が次に何を言うのだろうかと膝を乗り出したでことであろうし、それに続く *Mir fehlt der Glaube.* というファウストの言葉もいっそうはっきりと聞き手の脳裡に刻み込まれたにちがいない。最近では話し言葉にすら進出し始めたこの種の用法には、そのような語りかけの効果があるように思えるのである。